



恩師高木健太郎先生のご逝去を悼んで

高木健太郎先生は平成2年9月24日、消化器系の癌のため逝去されました。先生は昭和9年九州帝国大学医学部をご卒業後、同大生理学教室に入られ、石原誠教授に師事されました。昭和14年、新潟医科大学助教授として赴任され、昭和20年、同大学教授に昇任されました。昭和31年、久野寧教授の後任として、名古屋大学医学部第一生理学教室に赴任されました。その後、大学紛争真っただ中の名古屋大学医学部の運営の最高責任者として、紛争の収拾に尽くされました。昭和47年から、名古屋市立大学学長を8年間務められ、同大学の飛躍的發展に大きく貢献をされました。また、その間、日本学術会議会員、公立大学協会会長など日本の学術の発展に大いに寄与されました。私も生理学学会員にとりまして、先生が生理学研究所の設立にあたって計画の最初の段階から岡崎の地に設立されるに

いたる全ての過程でご尽力されたことは銘記されるべきでありましょう。その上、昭和55年からは、参議院議員として特に科学技術分野で活躍されました。中でも、別名“けんたろう”法案といわれる献体法案制定のためのご尽力、早い時期から生命倫理研究議員連盟を組織され、現在大きな社会問題となってきました脳死、臓器移植に関する諸問題を国政の場で議論する中心的存在としてのご活躍、WHO と協同して世界鍼灸学会連合の成立に漕ぎつけるためのご努力など、良識の府である参議院の議員としてのひたむきなご努力は後々まで語り継がれましょう。

生理学者としての先生は、多岐にわたる分野のそれぞれで、輝かしい業績をあげられました。昭和10年代末の生理学会における、先生の迷走神経の呼吸調節作用についてのご発表は、生理学会史上に残る有名な論

争を巻き起こし、そのため、当時、先生の発表と並行した会場で講演をされた方は、潮の引くような聴衆の減少に悩まされたと、今でも語り継がれています。昭和20年代初めごろから始まる皮膚圧反射の研究は、日本の生理学の産んだ極めてオリジナリティに富んだ研究の一つとして高く評価され、紫綬褒章をはじめ数々の賞が授与されています。この研究は、ご病氣療養中のご自身の体の一侧を椅子の肘掛けに寄り掛けられた際に、その側の汗が減少することに気づかれたことが発端となり、久野教授らにより見出されていた半側性発汗現象の発現機序が皮膚圧迫による反射であることを明らかにされたものです。その後のご研究により、この反射は、自律系の様々な現象のみならず、筋の緊張性活動、睡眠などの脳活動など、広範な生体の基本的機能の調節に影響を及ぼすことが明らかになりました。また、以前から、圧刺激と針刺激との類似性に興味を持たれ、日中医学の交流を通じて科学としての鍼灸医学、東洋医学の確立に努力されました。

私は、先生が名古屋大学に赴任後最初の大学院生にさせていただきましたが、先生はご自身も被験者となられて実験に情熱を傾けられ、私どもに実験方法などを型通りに指導されることは余りありませんでした。しかし、昼御飯を食べながら、また酒を飲みながら、自然現象、社会現象を問わず、普通の人なら見過してしまふような事柄に鋭い観察の目を向けられ、その背後に在る全体の仕組みを見透される、洞察力に富んだお話をきかせて下さいました。その揚げ句、目を輝かせて、“君、これ面白いよ、やってごらん”と毎日のように新しいテーマを提示され、私どもは少なからず辟易の思いをしたこともあります。それらは弟子に対し

て、生体の働きをいかに捉え、いかに究めていくかを示される先生流の滋養の与え方でありました。このような先生の、あらゆる現象への飽くなき興味と湧き出るアイディアは若い学徒を魅きつけ、当時、第一生理学教室には、多くの臨床教室、他学部、他大学の若い研究者も入交じり、サロン、というよりは“梁山泊”の観を呈していました。先生の寛容なお人柄は、この多様な人材を受け入れ、育てられ、生理学を始めとした医学界に多くの俊秀を輩出させ、ここに先生の教育者としての真骨頂がみられます。

真の国際化が問われ直されている現在、高木先生のような人材を失ったことは国家的に大きな損失でありましょう。お亡くなりになる2カ月前に、先生が国際医科学団体協議会で英語で講演され、絶賛を浴びた“Genetic Screening-Policymaking Aspects”のご遺稿を読ませて頂くにつけその感を深くします。

先生は、一見、全く異なった領域において立派にその任を果たされるという、余人には真似のできない人生を歩まれましたが、常に、この学者としての目と洞察力が根底になって、その全てのご活動を自然体で成し遂げられたように思います。弟子として、こういった先生の真のお姿が理解できるようになった今、失ったものの大きさがひしひしと感じられます。先生の生きざまやお仕事の総まとめなど、あの“語り”そのままの文章で残していただけでしたら、などなど思いは尽きず、残念という気持ちを拭い去ることが出来ません。

今はただ、偉大な足跡を残されました先生が安らかにお休み下さいますよう、心からご冥福をお祈り致します。
(熊澤孝朗)